

フレーベル教育思想の基層文化

～聖母マリア信仰をてがかりに～

甲 斐 規 雄

はじめに

学部時代に手を染めたF. フレーベル研究は、大学院では「神」、「人間」の概念について衝動 *der Trieb*を基本的視点にして理解しようとした。⁽¹⁾その後通信教育部の設置・運営と、その研究も1970年Unescoの専門家会議出席から教師教育⁽²⁾に追われ、その任を終えた1984年、フレーベル研究を再開した。

その15年間の教育実践は、フレーベル教育思想研究の関心を近代ドイツの政治、経済、思想、宗教等人間が、生活する場の歴史と現状という因って立つ時代精神、共有文化・文明等基層文化に自ずから傾斜させていた。それは、大学、学会の研究報告を整理する必要性から気付いたことである。⁽³⁾

それは、神秘主義、啓蒙思想、新人文主義、普遍、古代ギリシャ、祖国、民族、宗教改革、解放戦争、ブルシェンシャフト等であった。しかし、このほかにイギリスの産業革命、経済、政治についても有形無形の影響を教育思想に及ぼしているはずである。更に研究を進めてみたいと思う。

しかし、一方で宗教改革について以前から疑問を抱いていたことがあった。それは、「聖母マリア信仰」である。⁽⁴⁾中世末期、マリア聖造物と天国の関係は、150年頃には「アベ・マリア」と唱えることで400年の罪が許され、更にロザリオ兄弟会では6万年を保障した。しかし、聖書の原点に立ち戻る事を提唱したLuther, M. (1509-64), Calvin, J. (1483-1546)等の宗教改革者は、「聖母被昇天」、「無原罪の御宿り」を含めて、聖母マリア信仰は迷信であり、崇拜は偶像崇拜であるとしていたはずである。

ましてフレーベルの父親は有力な牧師であり、⁽⁵⁾彼自身も小学校入学の週に課せられた聖書の文句は、「マタイ伝」第6章33「まず汝、神の国を求めよ。」*Trachtet am ersten noch dem Reiche Gottes.*であったと自伝に述べており、その後彼の教育の目的は「神の国を求めよ」ということであった。主著『人間教育』の中で「人が子どもとしてこの世に現れたその時から、いやそれよりも早く、いわばマリアのところにおり、マリアのものであり、その告知を受けるころから、すなわち母の胎内にあり、また母の懐に居るときから……」⁽⁶⁾以外に彼の自伝を含めて著書、その他の記録に「マリア」の名前を見ることはない。また、先行研究もないと思う。

その理由として考えられることは、一つはプロイセン政府のフレーベル幼稚園禁止令であり、⁽⁷⁾後一つは1806年Frankfurt am MeinのHolzhausen家の家庭教師をしたことから始まるCaroline von Holzhausen夫人との関わりである。

この「聖母マリア信仰」は古代ゲルマンとは無関係であったのか、聖母マリアの「ユリ」、処女マリアの聖なる愛と優美さを象徴する深紅の「バラ」、キリストの母、神の母、母性の鏡、古代ギリシャとマリア、本当にルターはマリア信仰に反対であったのか、カトリッ

クの退廃と宗教改革に介在するマリア信仰・免罪符等その論議は沸騰している。この中に、『人間の教育』の“Ihm”「彼に」を「キリストに」、秘儀とされる『1840年の幼稚園創設計画並びに1843年の弁明書』の“Ihr”「彼女に」を「マリアに」という読み代えはフレーベル研究の冒流であろうか。

1. フレーベル教育思想の基層文化

ゲッティンゲン大学の言語学の教授であったグリム兄弟 (Jacob & Wilhelm Grimm) は、ドイツを隈無く歩き回り、周辺各国からの移民を含めて、ドイツの素朴な民衆昔話、子どもと家庭の昔話を書き留め、1812年『グリム童話集』を初版公刊、1857年の第七版までに書き換えが行われている。そしてその童話は、ドイツ生粋の口頭伝承文芸となり、ドイツ文化の基層を作り上げた。中村雄二郎は、これをYeats, W. B., Blonté, E.を含めて基層文化のでき方の典型としている。しかし、このグリム兄弟は、この改版の根拠をその時代精神、共通文化、ドイツの基層文化にあるとしている。

石塚正英は、『『白雪姫』とフェティシユ信仰』で「グリム兄弟が七度にわたって編集・増補を続けて成立したあの『白雪姫』物語にはく中略>ヘルダーに始まる古代諸民族とその文化の賞賛が刻印された。それと同時に、ルソーに感化されたペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) に教えを受けたフレーベル (Friedrich W. A. Fröbel 1782-1852) らの推進するロマン主義的教育思想普及の時代にあつて、教育的配慮からするさまざまな書き換えが行われた。」⁽⁹⁾と述べている。

更にナポレオン戦争とヨーロッパ・ナショナリズムは、イェナ大学にブルシェンシャフト⁽⁹⁾を結成させ、黒、赤、金の三色旗を掲げ、ドイツの愛国的運動に発展し、やがて解放戦争への従軍という方向に発展する。学生運動は、名誉、自由、祖国⁽¹⁰⁾を標語にして、ナポレオン影響下の大学改革に抵抗することになる。⁽¹¹⁾

それはHerder, J. G. (1744-1803)の近代ドイツ思想、特に教育思想への多大な影響に起因する。Königberg大学でのKant, I. 哲学を受講、そのドイツの合理主義に断固たる抵抗を示し、神秘主義⁽¹²⁾に影響されることになる。⁽¹³⁾そして、『批評の森』(1969)、『歌謡に現われた民族の声』(1778)、『人類歴史哲学への理念』(1784)に一貫して、古代ギリシャ人、古代ギリシャ⁽¹⁴⁾の学芸の美的道徳的教育による人間性Menschlichkeitの円満な調和をHumanitätにまで高め、それを新人文主義の根本精神としている。その古代社会のキリストの予告が、創造から終末まで、つまり人間の墮落から終末の審判までの現今の人類に向かって話しかけている。諸民族、それぞれの時代も、終局では神によって運命が定められた「人類と世界」の演劇の瞬間であり、それは、楽園から墮落へそして救済status grazieのドラマであるとしている。

そこには、Rousseau, J.-J. (1712-78)の「自然」は、「人文」に取って代わっている。あくまでも人類が歴史の主体であり、人類の歴史は野蛮、非合理から理性への途上であり、理性的な究極状態への進歩であるとする。人間の多様な顕現の中に多様を直観し、根本の現象を直観する。これは、「直観と感情に精神の最も根源がある。そして宗教に精神の最も微妙な花が咲く」によく表現されており、Goethe, J. W. von. (1749-1832)の個々の動物、

植物の多様の中に、根本現象Urtypusを心眼で直観することに引き継がれている。

更にその人間性Menschlichkeitの発展は、歴史的に見れば民族的に、民族という大きな個性の歴史的発展において表現され、民族的には個性的に、独自の姿でその人間性を表現する。その意味で民族の発展はバラバラのように見えても、人間性の発展という意味で相互に有機的に関係しており、人間固有の本質を実現しきっているという意味では、神の世界計画、つまり神の勢力が分化し発展して自然界、人間界が、それぞれの民族が刻印されて存在している。これは、ドイツにおける合理主義に断固たる抵抗を示し、神秘主義の世界観なのかもしれない。

その意味で、グリム兄弟⁽¹⁵⁾の『グリム童話集』の初版公刊から1857年の第七版までの書き換えは、明らかに「神秘主義」、「啓蒙思想」、「新人文主義」、「普遍」、「古代ギリシャ」、「祖国」、「民族」、「宗教改革」、「解放戦争」、「ブルシェンシャフト」という近代ドイツの基層文化と一体化したものであり、『グリム童話』は、その都度新に基層文化に編入されていったことになる。

2. フレーベル教育思想の聖母マリア信仰

(1) ドイツ啓蒙思想の宗教性

フレーベルは、「父の精神、父の心情、父の生命der väterliche Geist, das väterliche Gemüth, das väterliche Lebenは、息子達の生命と存在を与えたからといって、決して分割されたり、減少したりしない。＜中略＞そのまま父である。＜中略＞数千年前に存在した人間、人間の精神は、数千年後に、個別的な存在として地上に、そうでなければ空間auf der Erde, oder sonst im Raumeに存在するようになる人間、人間の精神と一つになって感じたり、またこれらの人たちと一つになって働いたりするin Einigung fühlen. in Einigung wirkenことができないだろうか。」⁽¹⁶⁾この考え方は、まさに基層文化であるHerder, J.G.の近代ドイツ思想、人類の系統発生と個人の個体発生の関係を彼は神と人間との関係に高めていく。「純粋に精神的なものの領域を超時間的、超空間的なものdes Außerzeitlichen und Außerräumlichenの領域を、つまり神的な領域の中を昇ったり降ったり、また彷徨ったりすることを導いてくれる梯子と光Leiter und Lichtを持たずにいる」⁽¹⁶⁾人間を「純粋で曇りのない人間、特に両親の、しかも精神的、人間的な関係の中に神的＝人間的Göttlich＝Menschlichesなものが反映するのであることを認識する。そしてこの純粋な人間の人間に対する純粋な関係reinen Verhältnisse Gottes zum Menschen und des Menschen zu Gottを認識」⁽¹⁶⁾して欲しいと願っている。この段階では、神と人とは一つになっており、人間が神なのか、神が人間なのか分からない。まさに不滅の世界、神の国das Reich Gottesの状態に到達している。ここに神が、イエスが永遠に生きるように、人間も永遠の生命を享ける状態である。

フレーベルは、村立女子小学校時代⁽¹⁷⁾の復誦「まず汝、神の国を求めよ。」Trachtet am ersten noch dem Reiche Gottes.に影響されただけでなく、「神的なものの作用は、妨害されない状態においては必ず善であるし、また善でなければならない。全く善以外のなものでもありえないからである。kan gar nicht anders als gut sein＜中略＞生まれた

ばかりの人間でも<中略>最善のものを意志する。」⁽¹⁸⁾悪は善の欠乏した状態と説く善の考え方を前提とすることにより、この神の国は意味を持つてくる。そしてまた永遠の神との合一へと収斂することをこの不滅の世界は意味している。

そこでフレーベルは、「イエスの生涯、事業そして性格が述べられるとき、私はしばしば内面的に本当に同調した。その時私はさめざめと泣き、何時かは私もこれに似た生活を送ることができるという確固とした憧憬が心に満ちた」⁽¹⁹⁾という確信のもとに「人間は、誰でも神から生じてきたものとしてAls aus Gott hervorgegangen, 神を通して存続し、神の中に生きるものとして、自分を高め、イエスの宗教に、キリスト教に到達しなければならぬ。」⁽²⁰⁾と、人間教育を主張する。「どんな人間にも人類の一員として神の子としてGlied der Menschheit und Kind Gottes, それぞれ人間性の全体die Ganze Menschheitが内在しているが、それはそれぞれ固有の、独得の、個人的な、そしてその人独自の仕方で各人の中に表現され刻印されているのであって、人間性、神の本質das Wesen der Menschheit und Gottesが、その無限性、永遠性において、しかもあらゆる多様性を含むものとして予感されるgeahnenためには、益々深く認識され、生き生きと明確に予感されるためには、人間性の全体がそれぞれ個人の中に、全く独得の唯一の仕方で表現されなければならない。」⁽²¹⁾と主張する。Spranger, E. の「人間の魂が発展する。Die Menschenseele entwickelt sich.」とは言い得て妙である。⁽²²⁾

しかし、一方でこの主張は「人類が地上において到達しうる完全性をこの棲家で獲得するまでは世界から決して滅びない」⁽²³⁾という確信なしには成立しないし、Fichte, J. G. (1762-1814)のベルリン大会堂での講演の影響、また彼自身が述べる人類の一般の危殆のためにLützow義勇軍に加わった事実からだけでは、彼のこの確固たる想いは説明できない。⁽²⁴⁾

彼の主著『人間の教育』という普遍的なテーマも、そして巻頭に書かれた“Ihm”の文字も、そして彼の教育実践の場であるカイルハウ学園、幼稚園でさえも、その名称の先頭に“allgemeine deutsche”の文字を冠するのも、単なる愛国心だけではなく、イエス・キリストに対する深い想い、人類への想いが含まれている。その神の子、人間の模範キリストを産んだ母親がマリアである。彼の想いが、たとえプロテスタントであったにしろ、聖母マリアにその思いが募ったとして、何の不思議があろうか。

(2) 聖母マリア信仰

彼はMarenholz-Bülow (1810-1893)夫人の尽力で1860年9月27日から29日までの3日間リーベンシュタインで教育者会議を開催することができ、女性保育者養成機関の公式声明が決議されている。彼女がフレーベルとその緑の野に包まれた場所で、彼はじっと立ち止まって「マーレンホルツさん、あたりを見てごらん下さい。ここは私たちの学園を設けるのにふさわしい美しい場所です。そして名前も大変にふさわしいではありませんか。－マリエンタール、マリアの谷－マリアが世界に最初の世界の救い主を育てたように、人間の母となるべき多くのマリアを育てあげたいものですね」⁽²⁵⁾と夫人に話しかけている。これは、夫人の一方的な話しのため、信憑性を問われても致し方ないが気になる部分である。プロイセンというプロテスタント領邦にとって、このことはどのようなことを意味するの

であろうか。

しかし、彼の著書(前述注記(6))、Marenholz-Bülow夫人に話しかけている以外に「マリア」の言葉を見ることはできない。

『母の歌と愛撫の歌』は、家庭における「母と子と神」の三位一体観に基づいた母のための著作である。母が愛し子を神の子と見、そして愛し子を愛撫することによって自らも神を見、自分自身を知る。このとき母は神と一体になっている。「マリア」が常に見えていたのかもしれない。

1782年4月21日牧師の子として誕生、母は1783年2月7日に他界する。母の愛情を自覚して受けることもなく、父と子の家庭のスタートであった。その後、継母のフレーベルに対する対応は、「両親の愛、とりわけ母の愛情に飢えていた。〈中略〉単純な真心のこもった子どもらしい愛情を新しい母に捧げた。この感情は素直に受け入れられかつ報われた。〈中略〉まもなく誕生した男児に母の愛情は彼に移され私を他人扱いした。」⁽²⁶⁾このときのDuからErへの呼称は、彼をして「崇高な純粋な内部内部生命を意識するようになり、一生私の伴侶であったあの尊い自己感情Selbstgefühlや道徳的自尊心moralischen Stolzeの基礎が培われた」⁽²⁷⁾ことから推測すると、フレーベルが、現実の、具体的な母の愛情ではなく、普遍的な母マリアを求め続けたとしても不思議ではない。

1830年頃のヨーロッパでは、フランス革命、ヨーロッパ・ナショナリズムの混乱は、徐々に落ち着きを取り戻し、政治、経済、宗教にも再建の兆しが見え始めていた。そして、ロマン主義的な新人文主義の運動が繰り広げられるようになり、聖母マリアは、バラ、ユリ、スマレ、マーガレットなどの美しい花にたとえられていた。これは、前述のHerder, J.G.のドイツ合理主義に断固たる抵抗、合理主義の反動で、ドイツでもバラ、ユリ等の美しい花の登場が、聖母マリア信仰の根底となっているのではないだろうか。そこには、カトリック、プロテスタントの宗教戦争の垣根を越えて、清純、気品、優雅、深淵という内部から溢れ出る女性の理想、人類の母、普遍的な母の模範、キリストを産んだ母マリアが偶像ではなく、普遍的な姿としての聖母マリアである。マリアが「人性」Menschlichkeit、「神性」Göttlichkeitを併せ持つ存在であることが、児童神性論としての教育学を産み出す根底にあったというのは極論であろうか。

(3) 聖母マリア崇拜

1782年4月21日この世に生を享け、人間の母となるべき多くのマリア、全ての子どもたちの母であるマリアを育てあげることに尽力したフレーベルの70歳の祝祭(1852年4月21日)は、「汝は静かにバラの扉を開く……」に始まった。「キリスト降誕祭」の贈り物を載せた机……その上には、愛らしく厳かなマリアの絵が掛けられていた。それは、崇拜の念を持って跪いている少年ヨハネの前で、マリアが、彼女の膝の上で休む幼児イエスと、慈母のような優美さの中で愛に包まれながら一体になっていた。」⁽²⁸⁾ここには、プロテスタント教会が聖母マリア崇拜の対象になっていたマリア像、マリアを題材としたイコン(聖画像)、壁画、肖像画全てを排除した情景がない。

「崇拜の念を持って跪いている少年ヨハネの前で、マリアが、彼女の膝の上で休む幼児イエスと、慈母のような優美さの中で愛に包まれ」ている聖家族、世界中の家庭が、この

ような家族になって欲しいと願っているフレーベルにとって最高の演出であったと思う。その二ヶ月後6月21日18時30分眠るように、出産後昇天した実母、マリアの許に旅だったのだから。

3. 聖母マリアとフレーベル教育思想

(1) ユリの花とフレーベルの人間教育思想

シュプランガーは「ロマン主義的人間romantischen Gemüternには、輪郭のはっきりしない、中空に姿を消してしまうような憧憬が息づいていることを知っている。そのような人間は、その憧憬を表現するために青い花を探し出すシンボルを創造した。フレーベルの内なる世界のその場所にユリが足踏みしていた。」⁽²⁹⁾と述べている。このユリは何を意味しているのであろうか。そのユリの花に「マリア」を想定して更に読み解いてみたい。

そして「その植物は姉妹であり続けて」⁽³⁰⁾も男子であるフレーベルを牧師である父は、1789年女子小学校に通学させることになったことを先に述べた。つまりユリは、年長のお姉さんたちを取って代わる。彼女たちと聖書を読み、教会で賛美歌を歌った。その中で「我が心も霊も高く昇れ」Schwing dich auf mein Herz, 「キリスト者であることの尊さ」Es kostet vielein Christ zu sein が生涯の生命の歌になっている。

更にそのユリは、1806年のフランクフルトのCaroline von Holzhausen夫人との出会いで対象が代わっている。シュプランガーは「彼がそこで三人の生徒の教師を体験し彼らに行ったことは、フレーベルより七歳年上のCaroline von Holzhausenとの魂の出会い(Seelen begegnung)に比べれば影が薄いと言わざるを得ない。始めて彼は高い教養を持った、しかも真に母性的な感性を持つ女性と出会った。」⁽³¹⁾と述べており、ユリの美しい花マリアは、Caroline夫人に取って代わる。「彼が内面に抱いていた憧憬の象徴を彼は彼女の魂の中に読みとり始めた。彼女の結婚がここではvon Holzhausenの要因で既に破綻していた。＜中略＞自然に育まれた友情は、妻であり母であるCarolineの痛ましい運命に心から同情し、深まっていった。」⁽³²⁾

しかし、この想いは破綻しているはずのそのマリアが、五番目の子ども、後のkleine Carolineと謂われた女兒の出産を待ち受けていることに衝撃を受け、「フレーベルの内面の苦闘の、それは始まりだった。彼ははずたずたにされ、傷つき、幻滅した。だがそれでもなお彼の心は求め続けた。フレーベルは、自分を繰返しカロリーネに向かわせていた力から自由になったのは25年後であった。」⁽³³⁾

「小さなCarolineが誕生し、最初の誕生日祝いが開催された時、家庭教師とその生徒たちは独自のシンボルを作って祝福した。花壇に一本の沢山の蕾を持ったユリeine viel knospige Lilieを植え、その上に雲の印を付けた。その雲は太陽の光がさすと、すかし絵のように「神の庭」Gottes Gartenという言葉が浮き彫りにされるようになっていた。神の庭は子どもの庭Kindergartenより古い歴史をもつことを誰が聞き逃すだろうか。そして、このユリが、太陽に向かって伸びていく母と子の心の清純の象徴と破壊されることのない清純さ、そして切り離すことのできない統一Einheitの象徴となるに違いないということを感じない人は居なかった。」⁽³⁴⁾

1813年軍隊生活を終え、天職Bestimmungの次の場所に向かった。Düsserdorf, Lünen, Mainz, Frankfurt, Rudolstadt そしてBerlin に向かっている。「まもなく“F”⁽³⁵⁾に着き、
 <中略>花園に立ち寄った。<中略>私は、そこに一本のユリの花も見あたらないことに
 ひどく驚いた。花園の所有者は<中略>「まだ誰もこの花園にユリの花が植えられていな
 いことを残念がった人は居ません」と言った。しかし、私は、此処で何を恋しがり、何を
 求めているか理解できた。<中略>“Du suchst des Herzensstillen Frieden, des Lebens
 Einklang, der Seele Klarheit in den Bilde, der Stillen, klaren, einsachen Lilie.”
 種々各種美しい景観を作ってくれる花園もユリの花がなくしては、統一と調和の欠いた目
 の前を通り過ぎる雑然とした生活風景のように見えた。他日散歩して田舎のある家の前で
 美しく咲いたユリの花を見かけた。その時の私の喜びは大きかった。しかし、一つの垣根
 がユリ⁽³⁶⁾と私とを引き離していた。」⁽³⁷⁾Sprangerは、ユリと「フレーベルの人間教育の思想
 が、どのように自然哲学的=神秘主義的枠組みに結びつけられているか」と象徴的に述べて
 いる。⁽³⁸⁾

(2) 人間教育の基礎教育と聖母マリア

ボルノーは『人間の教育』の「新鮮で快活に、花園のユリの花のように、神から与えら
 れた生命に従って、母の保護と父の慎重さに支えられ、神的法則に従って作用する自然に
 守られ、神の崇高な祝福の下に、人間よ、神の苑である家庭において大きく成長せよ。」
 を引用して、「この中にフレーベルの教育学上の根本態度の全体の前提が凝縮されている。
 すなわち、神的全体の中に庇護されているとする彼の宗教的基本感情、および植物的、有
 機体的発達という、典型的にロマン主義的な人間発達のイメージ<中略>フレーベル自身
 が再三再四述べている世話、「生活の世話」(Lebenspflege)はかくして、彼の教育理解の
 特徴的な表示となる。この彼の教育理解を端的に表すのが、幼稚園(子どもの園)という名
 称である。」と述べ、人間教育の基礎段階としての一般ドイツ幼稚園の「幼稚園の設立及
 び実施のための計画案」が1840年5月1日提示され、その正式なタイトルは長文のもので
 あるが、「それだけでこの幼稚園の全体のイメージを与えてくれる」⁽³⁹⁾と述べている。その
 表題は以下の通りである。⁽⁴⁰⁾

1840

Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!

Entwurf eines Planes zur Begründung und Ausführung eines

K I N D E R - G A R T E N S,

einer allgemeinen Anstalt zur Verbreitung allseitiger Beachtung

des Lebens der Kinder,

besonders durch Pflege ihres Tätigkeitstriebes.

Den Deutschen Frauen und Jungfrauen als ein Werk zu würdiger

Mitfeier des vierhundertjährigen Jubelfestes der Erfindung der

Buchdruckerkunst zur Prüfung und Mitwirkung vorgelegt.

Ihr

ここで、重要なことはボルノーの言う“Ihr”という女性名詞の3格である。この「彼女に」を彼は、秘儀に満ちた献辞としており、フレーベルの主著『人間の教育』の冒頭の“Ihm”という男性名詞の3格と意義深い対応をなしているとしている。小笠原道雄も注記して「この「彼に」が具体的にだれを指すのか一義的な解釈が困難であると同様に、この「彼女に」もヴィルヘルミーネ(フレーベル夫人)を指すのか、あるいは女性一般、母親を意味するかは定かではない⁽⁴¹⁾としている。

シュブランガーは、「自著『人間の教育』を「彼に」(つまりイエス)に捧げたフレーベルは、従って、イエスを内なる本質として理解しているようである。」⁽⁴²⁾と述べている。

このように見てくると、小笠原道雄の「一義的な解釈が困難」であるが、現段階でシュブランガーの“Ihm”を「イエス」に、そして家庭の母から始まり、地域社会、やがて幼稚園へと母と子の関係は、「マリア」と「イエス」という関係へと昇華していると言ってもそれほど無謀な結論でもないように思う。

おわりに

近代ドイツの基層文化の研究過程で、フレーベル教育思想(文化)が意外にもグリム兄弟の基層文化確立に多大な影響を与えたことに活眼した。しかし、フレーベルとカロリーネ夫人との関わりについて、ハイラント、H.⁽⁴³⁾のように深く踏み込んでしまうと、彼が「幼稚園」の創始者であるだけに躊躇する研究分野であり、タブー視する感さえあった。

しかし、一方でプロテスタントと聖母マリア論争が集結したように見えていたが、人間科学の立場から見ると固定観念に囚われずもう一度、近代ドイツ思想の中で聖母マリアのことを扱ってみてもよいのではないかと思っていた。

聖母マリアがユリに、ユリは母に、そしてユリの咲く花園(幼稚園)では聖母マリアが母となることを夢見たフレーベルの想いに少し近づけた気がする。

フレーベルのユリは、9ヶ月育て神のもとに旅だった実母だったのかもしれない。母を捜し続け、そして子どもたちにも本当の母を見つけてあげようとしたのかもしれない。

注

- (1) 「F. フレーベル教育学の基本的視点の考察(1)(2)」『人文学研究紀要』第4, 5号 明星大学 1968, 1970
- (2) Correspondence Courses for In-service Teacher Training at Primary Level in Developing Countries, Report of a Meeting of International Experts Hamburg, September, Unesco Institute for Education, Hamburg, 1971,
 - ・「第三段階教育と遠隔教育」『教育学研究』日本教育学会 第43号第1号 1976年,
 - ・「大学通信教育における放送の利用の実践報告」放送教育開発センター『第一回大学放送教育研究シンポジウム報告書』1982年,
 - ・「教員の現職教育における方法としての通信教育」『通信教育研究集録』22号 日本通信教育学会 1973年等
- (3) ・「ドイツ啓蒙思想の宗教性とF. フレーベル」『教育学研究紀要』創刊号 明星大学 1986.
 - ・「新人文主義のギリシャへの回帰—F. フレーベルのゲッチンゲン大学時代を中心に

- 一」『教育学研究紀要』第2号 明星大学 1987.
- ・「F. フレーベルとイエナ大学—幼稚園禁止令の萌芽—」『教育学研究紀要』第4号 明星大学 1989.
 - ・「F. フレーベルとベルリン大学—人間教育への転向—」『教育学研究紀要』第5号 明星大学 1990.
 - ・「F. フレーベルの教育史的な位置づけの再考」『教育学研究紀要』第7号 明星大学 1992.
 - ・「F. フレーベルとBurschenschaft」『人間教育の探究』第5号 日本ペスタロッチー・フレーベル学会 1992.
 - ・「F. フレーベルと神秘主義」『教育の真理と探究』児玉三夫先生喜寿記念論文集所収 明星大学出版部 1993.
 - ・「プロティノスの二つの世界—F. フレーベルの世界観研究の手掛かりとして—」『教育学研究紀要』第8号 明星大学 1993.
 - ・「F. フレーベルの神秘主義—プロティノスの発出と還帰を手掛かりに—」(ペスタロッチー・フレーベルにおける合理主義と非合理主義『人間教育の探究』第7号) 日本ペスタロッチー・フレーベル学会 1995.
 - ・「フレーベルにおけるプロティノス的なもの—プロティノスの発出・還帰を手掛かりに—」『教育学研究紀要』第10号 明星大学 1995.
 - ・「フレーベルの形而上学的発達観—プロティノスの発出・還帰を基調にして—」『教育学研究紀要』第11号 明星大学 1996.
 - ・「フレーベル建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の周辺—『母の書』書き込みを手掛かりに—」『教育学研究紀要』第12号 明星大学 1997.
 - ・「フレーベル『人間教育』の枠組み—ペスタロッチ『母の書』, フレーベル『建議書』の「フレーベル『人間教育』の構想—ペスタロッチ『母の書』を始点にして—」『人間教育の探究』第10号所収) 日本ペスタロッチー・フレーベル学会 1998.
 - ・「フレーベルの経験的, 体験的発達観—『発達の=教育的人間陶冶の精神』を中心に—」『教育学研究紀要』第14号 明星大学 1999.
 - ・「フレーベルのdas Allgemeineの思想と教育実践—その普遍の思想の萌芽を実父との相克の中で—」『教育学研究紀要』第15号 明星大学 2000.
 - ・「フレーベルのdas Allgemeineの思想—『わがドイツ民族に寄せる』の意味するもの」『教育学研究紀要』第16号 明星大学 2001
- (4) シルヴィ・バルネイ『聖母マリア』(「知の再発見」双書, 船本弘毅監修, 遠藤ゆかり訳) 創元社 2001.
 - (5) 前掲「フレーベルのdas Allgemeineの思想と教育実践—その普遍の思想の萌芽を実父との相克の中で—」
 - (6) F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Die Menschenerziehung und Aufsätze verschiedenen Inhalts, hrsg. v. W. Lange. Verlag von Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin, 1863. S. 11
 - (7) 前掲「F. フレーベルとイエナ大学—幼稚園禁止令の萌芽—」
 - (8) 石塚正英『白雪姫とフェテッイシュ信仰』理想社 1995 65ページ
 - (9) 前掲「F. フレーベルとBurschenschaft」
 - (10) 前掲「フレーベルのdas Allgemeineの思想—『わがドイツ民族に寄せる』の意味するもの」
 - (11) 前掲「F. フレーベルとイエナ大学—幼稚園禁止令の萌芽—」
 - (12) 前掲「F. フレーベルの神秘主義—プロティノスの発出と還帰を手掛かりに—」
 - (13) 篠原助市『独逸教育思想史 上巻』創元社 1947 240-248ページ
 - (14) 前掲「新人文主義のギリシャへの回帰—F. フレーベルのゲッチンゲン大学時代を中心に—」

- (15) Grimm, J.L. (1785-1863) は, ドイツの言語学者で1817年Göttingen大学の教授, Grimm, W.K. (1786-1859)は, ドイツのゲルマン学者で1831年同大学の教授になっている。Fröbel, F. は, 1811年同大学に29歳で籍を移し, 更に翌年Berlin大学に移籍している。Göttingen大学は, Jena大学, Halle大学共に言語学の実績を挙げていた大学で, ナポレオンの大学改革の対象になっていた。そのためHumbolt, W., Fichte, J.G.により, 新たな理念に基づくBerlin大学が設立されている。
- (16) Die Menschenerziehung *ibid.* S.100-101
- (17) 牧師であった父の地位による不規則入学 (F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Autobiographie und kleine Schriften *ibid.* S.37)
- (18) Die Menschenerziehung *ibid.* S.5
- (19) *ibid.* S.107.
- (20) *ibid.*
- (21) *ibid.* S.13
- (22) E.Spranger, Aus Friedrich.Fröbels Gedankenwelt, Gedenkende zu F.Fröbels, 100, Todestag Gehalten am 21, Juni 1952, Quelle & Meyer, 1956, S.15.
- (23) Autobiographie und kleine Schriften, *ibid.* S.40.
- (24) *ibid.* S.107
- (25) マーレンホルツ-ビューロー『教育の原点—回想のフレーベル—』“Erinnerungen an Fröbel, 1876” 伊藤忠好訳 黎明書房 1972, 23頁
- (26) Autobiographie und kleine Schriften, *ibid.* S.33.
- (27) *ibid.*
- (28) 小笠原道雄『フレーベルとその時代』(教育の発見双書) 玉川大学出版部 1994 436ページ
- (29) Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt *ibid.* S.10
- (30) *ibid.* S.11
- (31) *ibid.* S.12
- (32) *ibid.*
- (33) 前掲『フレーベルとその時代』77ページ
- (34) Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt, *ibid.* S.12 文中下線は筆者
- (35) Caroline夫人が居るはずのFrankfurt ではないかと思う。
- (36) aber sie waren durch einen Zaum von mir getrennt.の“sie”は, die Lilie, マリアそしてCarolineのいずれにも該当する。Sprangerの「フランクフルトの別の女性の庭の庭にユリの花を見いだせない」は, この事を暗示しているのだろうか。
- (37) Autobiographie und kleine Schriften, *ibid.* S.111
- (38) Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt, *ibid.* S.16
- (39) Bollnow, O.F. 『フレーベルの教育学』(岡本英明訳) 玉川大学出版部 1973年 137-138ページ
- (40) Friedrich Föbel, Kleine Schriften und Brief von 1809-1851, Die Bildung der Kinder vor dem Schulfähigen Alter, und die Ausführung einer Bildungsanstalt zu Erziehern und Pflegern in dem angegebenen Alter, besonders die Bildung zu Lehrern an Kleinkinderschulen betreffend, Pädagogische Text, herg.von Willhelm Flitner, Kletta Cotta, 1984, S.114
- (41) 前掲書『フレーベルとその時代』319ページ
- (42) Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt, *ibid.* S.65
- (43) Helmut Heiland, Friedrich Fröbel, Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1982(『フレーベル入門』小笠原道雄, 藤川信夫訳 玉川大学出版部 1991)